

王昌齡詩譯注稿 (一)

岡田充博

本稿は、盛唐の詩人王昌齡の詩作品に対する、訳注の試みである。第一回目として古詩辺塞詩七篇を選んでみたが、今後も本誌の紙面を借りて、この試みを続けてゆきたいと考えている。

底本には、汲古書院『和刻本漢詩集成』Ⅰ所影の『王昌齡詩集』(據明許自昌校本)を使用し、宋代以前の總集類、或いは『全唐詩』なども随時参照した。ただ、字句の異同については主要なもののみを挙げ、異体字等については言及しなかつた。くわしくは李國勝氏の『王昌齡詩校注』(民國六十一年、文史哲出版社)の詳細な校勘記に據りたい。(もつとも、李氏の校勘記にも時折、遺漏・錯誤が見られる。気付いたものは注の中で指摘しておいた。)

なお、李氏の同書は、王昌齡の全詩作品に対する最初の(しかも現在までのところ恐らくは唯一の)注解の試みであり、裨益される所が少なくなかつた。しかし、こうした研究にもかかわらず、王昌齡の作品にはなお、考究の余地を残す部分が多いように思われる。その部

分を幾らかでも補い埋めることが出来たならというのが、二の作業を始めるにあたっての私の心づもりである。

*

*

*

變行路難

変行路難

1 向晚横吹悲

向晚 横吹おっすい 悲しみ

風動馬嘶合

風動ふぶきて 馬嘶と合す

3 前驅引旌節

前驅 旌節せいせつを引たなひかせ

千里陣雲匝

千里 陣雲ちんぐん匝おちる

5 單于下陰山

單于せんう 陰山を下り

沙磧空颯颯

沙磧 空むなしく 颯さう々さうたり

7 封侯取一戰 封侯 一戰に取らば

豈復念閨閣 豈あに復またた閨けい閣こくを念おもわんや

(『王昌齡詩集』卷ノ 唐文粹』卷12 『樂府詩集』卷71)

〔訳〕

暮れ方 悲しげに響く横笛の音に

風が運ぶ馬の嘶いななきが加わる

先を駆ける騎兵は旗印をなびかせ

空は一面 不吉な雲にとりまかれる

あれは単子が陰山を下っているのであろう

彼方に空しく砂塵が舞い上がる――

だが 一戦のうちに見事大名の位を手にしたならば

もう どうして遙かな妻を切なく思ふことなどあろうか

〔注〕

0. 變行路難 … 「行路難」は楽府の題名。『樂府詩集』卷70・雜曲歌辭の項に、「樂府

解題曰・行路難、備言世路艱難及離別悲傷之意、多以君不見爲首。……唐王昌齡又有變行路難」といふ。ただ、題辭に「變」を冠する例は他に見当たらない。

1. 横吹 … 樂器の名。西域伝来の笛の一種。樂府に横吹曲がある。『樂府詩集』

卷21・「横吹曲、其始亦謂之鼓吹、馬上奏之、蓋軍中之樂也。……」

2. 風動馬嘶合 … 類似した表現として、隋・薛道衡・「昭君辭」に「胡風帶秋月、嘶馬

雜歌聲」の句、さらに溯れば、漢・蔡琰・「悲憤詩」に「胡笳動兮邊馬鳴、孤雁歸兮聲嘒嘒」の句がある。

3. 前驅 … 行列のさきのり。先鋒。唐・駱賓王・「久戍邊城有懷京邑」・「懷鉛慙

後進、投筆願前驅」

引 … たなひかせる。唐・盧從愿・「奉和聖製送張說巡邊」・「上將發文昌、中軍靜朔方、占星引旌節、擇日拜壇場」

旌節…『王昌齡詩集』は「旌節」に作るが、『唐文粹』に従って「旌節」に改めた。

ともに、使者の持つてゆくはたじろし々の意味で大差はなさそうだが、ただ、辺塞を歌う作品においては、「旌節」の語が多く用いられるようである。唐・

李白・へ發白馬▽、「將軍發白馬、旌節渡黃河」唐・王昌齡・へ江上聞笛▽、「何當邊草白、旌節隴城陰」

4. 陣雲…戦場の空にあらわれる凶雲。唐・駱賓王・へ從軍中行路難二首・其二▽、「陣雲朝結晦天山、寒沙夕漲迷疏勒」唐・高適・へ塞下曲▽、「青海陣雲匝、

黑山兵氣衝」

5. 單于下陰山…「單于」は匈奴の首長。「陰山」は、今の内蒙古自治区綏遠省にある

山脈。古くから漢民族と北方民族との境界をなしていた。『史記』卷110・

匈奴列傳、「趙武靈王……築長城、代並陰山下、至高闕爲塞」唐・張守節・

『史記正義』、「括地志云、陰山在朔州北塞外突厥界」唐・王昌齡・へ出塞▽「但使龍城飛將在、不教胡馬度陰山」

6. 沙磧空颯颯…宋・鮑照・へ代出自薊北門行▽「疾風衝塞起、沙磧自飄揚」唐・

李白・へ江上秋懷▽、「颯颯風卷沙、茫茫霧縈洲」なお、同様な情景を歌う

詩句に、隋・楊素・へ出塞▽の「薄暮邊聲起、空飛胡騎塵」がある。

7. 封侯 .. 唐・楊炯・へ紫駟馬 ✓ ・「匈奴今未滅、晝地取封侯」

8. 閨閣 .. 「唐文粹」は「閨閣」に作るが、それでは韻が合わない。

塞下曲 三首其一

塞下の曲 うた

1 蟬鳴空桑林

蟬せみは鳴く 空桑の林

八月蕭關道

八月 蕭関しょうかんの道

3 出塞入塞寒

出塞 入塞 寒さむく

處處黃蘆草

処々 蘆草黄なり

5 從來幽并客

從來 幽并の客は

皆共塵沙老

皆みな 塵沙と共に老ゆ

7 莫作游俠兒

游俠の兒と作なつて

矜誇紫騮好

紫騮の好よきに矜誇するなかれ

(「王昌齡詩集」卷ノ

「國秀集」卷下

「文苑英華」卷197

「樂府詩

「詠」

葉を落とした桑林に名残りのセミが鳴く

秋の氣配ただよう蕭関の道

塞そうごを発たち 塞そうごに入る 兵士の姿も寒々と

其処そこ此処ここに目立つのは 黄ばんだアシの茂み

昔から 幽并ゆうへい育そだちの俠客達は

みな 沙漠の戦場で老いてゆく

あゝ若者よ そんな無頼の群に身を投げて

得意氣に紫駟に打ち跨るまねはせぬものだ

〔注〕

0. 塞下曲…「塞下曲」は樂府の題名。「樂府詩集」は、卷92・新樂府辭・樂府雜題の項に収める。李國勝氏の校記が「文苑英華作塞上曲……」とするのは誤り。「文苑英華」も「塞下曲」の部類に収めている。

1. 空桑林…「王昌齡詩集」は「桑樹間」に作る。しかし、空海「文鏡秘府論」・南卷に二の一節を引き、「蟬鳴空桑林、八月蕭關道」とする。今、これに従う。唐・李白・「江上秋懷」・「山蟬號枯桑、始復知天秋」

2. 蕭關…関所の名。甘肅省固原縣村近にあった。関中四関の一。「元和郡縣志」卷3・關内道・原州・平高縣、「蕭關故城在縣東南三十里、漢書文帝十四年匈奴入蕭關殺北地都尉是也」。唐・岑參・「胡笳歌送顏真卿使赴河隴」・「涼州八月蕭關道、北風吹斷天山草」。

3. 出塞入塞寒…「國秀集」は「出塞復入塞」に作る。「文苑英華」「樂府詩集」は「出塞入塞雲」に作る。

5. 幽并 .. 和刻本「王昌齡詩集」のみが「并幽谷」に作るが、よくない。他の諸本に従って「幽并客」と改めた。「幽并」は幽州と并州。戦国時代の燕趙の地（現在の河北省北部と山西省北部）で、その風俗は任俠を尚んだ。魏・曹植・「白馬篇」
「借問誰家子、幽并遊俠兒、少小去鄉邑、揚聲沙漠垂」
「隋書」・卷30・地理志中・冀州・「自古言勇俠者、皆推幽并」

6. 皆共塵沙老 .. 「國秀集」
「樂府詩集」は「皆向沙場老」に作る。

7. 莫作遊俠兒 .. 「文苑英華」は「莫學遊俠人」に作る。（李氏校記には記入もれ。）

8. 紫駟 .. 「王昌齡詩集」が「紫駟」に作るのは誤り。他の諸本に従う。「紫駟」は赤栗毛の馬。或いは駿馬の意味にも用いる。唐・楊炯・「紫駟馬」
「俠客重周遊、金鞭控紫駟」
また、「樂府詩集」・卷24・横吹曲辭・紫駟馬の項に次のように言う。「古今樂錄曰、紫駟馬古辭云、十五從軍征、八十始得歸、道逢鄉里人、家中有阿誰、……蓋從軍久戍懷歸而作也」この作品の中での「紫駟」は、おそらく、こうした古歌辭を背後に意識しつつ用いられているのであろう。

塞下曲 三首其二

1 飲馬度秋水 馬に飲みつて秋水を度かたれば

水寒風似刀 水寒つめたくして風は刀に似たり

3 平沙日未没 平沙 日未だ没せず

黯黯見臨洮 黯々として臨りん洮とうの見ゆ

5 昔日長城戰 昔日 長城の戰たたかい

咸言意氣高 咸みな言う 意氣は高しと

7 黃塵足今古 黃塵 今古に足たり

白骨亂蓬蒿 白骨 蓬蒿に乱る

() 『王昌齡詩集』卷ノ 『河嶽英靈集』卷中 『國秀集』卷下 『樂府』

〔訳〕

馬に水をやって秋の川を渡れば
水はつめたく 吹く風は刃やばのよう
砂漠のはてに日はまだ落ちず
遙かに暗く臨兆りんきょうの町が見える
その昔 長城のいくさでは
誰もが意気を誇ったものを――
黄塵は古今に絶え間なく
白骨だけが草叢くさむらに散る

〔注〕

0. 塞下曲…『國秀集』は「望臨洮」に作る。

1. 飲馬…魏・陳琳・へ飲馬長城窟行▽。「飲馬長城窟、水寒傷馬骨」。

2. 風似刀…唐・賀知章・へ詠柳▽。「不知細葉誰裁出、二月春風似剪刀」。

3. 平沙…唐・岑參・へ磧中作▽。「今夜不知何處宿、平沙萬里絕人煙」。

4. 黯黯…くらいさま。梁・元帝・へ蕩婦秋思賦▽。「日黯黯而將暮、風騷騷而渡

河」唐・高適・へ薊門行 五首其五▽。「黯黯長城外、日沒更煙塵」。

臨洮…今の甘肅省岷縣の地。秦の始皇帝が將軍蒙恬に長城を築かせた時、ここを起

点としたという。『史記』・卷88・蒙恬列傳。「秦已并天下、反使蒙恬將三

十萬衆、北逐戎狄、收河南、築長城、因地形用制險塞、起臨洮、至遼東」宋・

裴駰・『史記集解』・「(臨洮) 徐廣曰、屬隴西」。

5. 昔日…『河嶽英靈集』は「當昔」、『國秀集』は「當日」に作る。

長城…『樂府詩集』は「龍城」に作る。「臨洮」との関連性を考えて、「長城」の

方を採った。

7. 黃塵足今古…「足」は『河嶽英靈集』『國秀集』『樂府詩集』では「是」に作る。

なお、『全唐詩』の注記には一に「漏」に作るとも言う。「足」が良いように思
う。また、『樂府詩集』には、この句の下に「一作黃沙滿今古」の注記がある。
「黃塵」は、いくさによつて捲きおこる砂塵。戰塵。梁・江淹・八恨賦▽。
「黃塵布地、歌吹四起」唐・李善・注・「山陽公載記曰、賈詡鳴鼓雷震、黃塵
蔽天、李陵書曰、邊聲四起」

8. 白骨亂蓬蒿…「蓬蒿」は「蓬」も「蒿」もよもぎ、よもぎなどの生えたくさむら。
魏・曹操・八蒿里行▽。「白骨露於野、千里無雞鳴」魏・王粲・八七哀詩▽。
「出門無所見、白骨蔽平原」

塞下曲

三首其三

秋風夜渡河

秋風 夜河かわを渡り

吹却雁門桑

吹却す 雁門の桑

遙見胡地獵

遙はるかに見ゆ 胡地の獵

韃馬宿嚴霜

韃馬たば 嚴霜げんそうに宿る

5 五道分兵去

五道 兵を分わかつて去る

孤軍百戰場

孤軍 百戦の場

7 功多翻下獄

功多くして翻かえつて獄に下り

士卒但心傷

士卒 但ただ心傷いたむ

(『王昌齡詩集』卷ノ 『樂府詩集』卷92)

〔詠〕

秋風は 夜 大河を渡り

雁門関の桑の葉を吹き払う

遠く胡地の狩を眺めつつ

車馬と共に霜降る中に野営する

五つの道に兵を分つて進みゆく
行く手は孤軍百戦の修羅場
しかし 戦功多おほき者がかえつて獄つなに繋がれては
兵士の心はただ暗い絶望にしずむだけだ

〔注〕

0. 塞下曲…『全唐詩』は「塞上曲」に作る。

1. 秋風夜渡河…冒頭の二句は、李白の「送崔氏昆季之金陵」詩の「秋風渡江來、吹落
山上月」と似る。

2. 吹却…「却」は「…し去る」「…し払う」等の意味を持つ語助の辞。張相『詩
詞曲語辭滙釋』に多くの例を引く。

雁門…今の山西省代縣の西北の地。ここに北境守備のための要塞があった。

『新唐書』卷39・地理志三・河東道・「代州鴈門郡、中都督府、…縣五、…
鴈門、上、有東陘關、西陘關」

唐・李白・八古風 季九首其六 ✓ 「昔別雁門關、今戍龍庭前」

3. 遙見胡地獵 .. この一句は、魏・曹植・八豔歌行 ✓ の「出自薊北門、遙望胡地桑」にヒントを得たものか。

4. 鞞馬 .. 和刻本「王昌齡詩集」は「鞞馬」に作る。李國勝氏が校注の底本として引く明・正徳十四年勾吳袁翼刊本「王昌齡詩集」では、「備馬」となっている。ここでは「樂府詩集」によつて「鞞馬」に改めた。

「鞞馬」は、杜甫「狂歌行贈四兄」詩に「長安秋雨十日泥、我曹鞞馬聽晨雞」とあり、仇兆鰲の詳注には「説文、鞞、車鞞也、一曰、駕於馬曰鞞」と記す。意味がもう一つは、きりしないが、おそらく、裝備を整えた車馬のことを言うのであらう。

嚴霜 .. 草木を枯らすきびしい霜。 唐・李白・八山鷓鴣詞 ✓ 「紫塞嚴霜如劍戟、蒼梧欲巢難背違」

5. 五道 .. 「南史」・卷56・呂僧珍傳・「建武二年、魏軍南攻、五道並進」
分兵 .. 宋・鮑照・八代出自薊北門行 ✓ 「徵騎屯廣武、分兵救朔方」

6. 百戰場 .. 唐・陶翰・八贈鄭員外 ✓ 「聞道五軍集、相邀百戰場」

7. 功多翻下獄 … この一句は、漢の將軍李廣の故事を意識したものであろう。 『史

記』・卷109・李將軍列傳、「廣以衛尉爲將軍、出鴈門擊匈奴、匈奴兵多、破敗廣軍、生得廣……廣行取胡兒弓、射殺追騎、以故得脱、於是至漢、漢下廣吏、吏當廣所失亡多、爲虜所生得、當斬、贖爲庶人。」 また、梁の劉孝威の「隴頭水」には、次のような詩句が見られる。「勿令如李廣、功多還不酬。」

塞下曲

塞下の曲うた

1 奉詔甘泉宮

詔を甘泉宮に奉じ

總徵天下兵

総すべて徵す 天下の兵

3 朝廷備禮出

朝廷 礼を備えて出いだし

郡國豫郊迎

郡國 予あらいめ郊迎す

5 紛紛幾萬人

紛々として幾万人なりや

去者無全生

去る者は生を全うするなし

7 臣願節宮廐

臣願おがわくば 宮廐を節したまい

分以賜邊城

分わかちて以もつて辺城に賜わらんことを

(『王昌齡詩集』拾遺 『文苑英華』卷197)

〔訳〕

詔を甘泉宮でうけたまわり

天下の兵をことごとく徴集する

朝廷は軍礼を備えてこれを送り出し

郡国はあらかじめ郊外に出迎える手厚さ

だが 紛々と続く幾万もの大軍も

この地を去れば生命いのちながらえる者はいない

御上よ 何とぞ宮中の養馬を減らし

辺城の士卒にお分かち与え下さい

〔注〕

0. 塞下曲…この作品、『王昌齡詩集』では拾遺に収める。なお、李氏校記に「文苑英華作塞上曲……」とあるのは誤り。『文苑英華』には「塞下曲」として収録されている。

1. 甘泉宮…漢の宮殿の名。もと秦の離宮であったのを漢の武帝が増築し、夏の避暑地とした。唐代の詩作品においては、驪山の離宮を指して用いられる。『漢書』卷87・揚雄傳上、「甘泉本因秦離宮、既奢秦、而武帝復增通天・高風・迎风」唐・高適「李雲南征蠻」・「歸來長安道、召見甘泉宮」

3. 備禮…原田憲雄氏は「王昌齡伝(一)」(『方向』14号所収)において、この句を「朝廷に礼を備えて出で」と訓読される。(69頁)しかし、下句との対応を考えれば、「朝廷が軍礼に則って手厚く送り出す」の意に取るのが自然ではないだろうか。また、「備禮」は、目上の者が目下の者に対する時に使うのが通例と言われる。(今鷹眞先生の御教示による。) 漢・蔡邕「郭有道碑文」・「州郡聞德、虚己備禮」

4. 郊迎… 郊外まで赴いて出迎える。敬意をこめた丁寧な出迎えを言う。『漢書』

卷57・八司馬相如傳下V・「至蜀・太守以下郊迎・縣令負弭矢前驅」 顔師古・

注・「迎於郊界也」

5. 紛紛… いろいろみだれて教の多いさまを言う。 漢・班固・へ西都賦V・「颺颺紛紛

贈繳相纏」 唐・李善・注・「颺颺紛紛・衆多之貌也」

6. 去者無全生… 唐・劉灣・へ雲南曲V・「去者無全生、十人九人死」

7. 節宮殿… 「宮殿」は宮中のうまや。結びの二句には、王昌齡自身の現実的主張が歌
い込まれていると見て良いであろう。 彼と同様な考えを持つ人物は、こ

の時代他にもいたようであり、『新唐書』卷121・崔日用傳には、次のような記事
が見られる。「日用從父兄日知、字子駿、少孤貧、力學、以明經進至兵部員外郎

…遷殿中少監、建言廐馬多、請分牧隴右、省關畿芻調」 崔日知のこの建言が
なされたのは、おおよそ開元（西暦713?741）の初頭頃と推定されるが、或いはこ
うした前例も、王昌齡の意識のうちにあつたかも知れない。

なお、『新唐書』・兵志の記事によれば、開元初頭から十年前後にかけての軍
用馬の不足は、かなり深刻な政治問題だったようである。従つて、今そうした背
後的な事情を重視するならば、ここからこの作品の制作年代を絞つてゆくことも
不可能ではなからう。しかし一方、その後、王毛仲らの尽力によつてこの問題が

解消されてゆくにつれ、内廐の養馬の数はさらに必要以上にふくれあがっていったようである。(たとえば、『明皇雜錄』に見える舞馬の故事などからも、当時の皇帝玄宗が多く駿馬を内廐にたくわえ、歡娛の用に当てていたことが想像される。)従つて、王昌齡の批判の目がもし専らこちらの方向に注がれていずれば、この作品の制作年代はさらに引き下げられても差支えないことになる筈であり、結局のところ、確論に辿りつくのは難かしい。

『新唐書』・卷50・兵志・「開元初、國馬益耗、……命王毛仲領内外閑廐、九年又詔：……自今諸州民勿限有無蔭、能家畜十馬以上、免帖驛郵遞征行、定戸無以馬爲贖、毛仲既領閑廐、馬稍稍復、始二十四萬、至十三年乃四十三萬、其後突厥款塞、玄宗厚撫之、歲許朔方軍西受降城爲互市、以金帛市馬、於河東・朔方・隴右牧之、既雜胡種、馬乃益壯。」唐・鄭處誨・『明皇雜錄』・補遺・「玄宗嘗命教舞馬四百蹄、各爲左右、分爲部目、爲某家罷某家驕、時塞外亦有善馬來貢者、上傳之教習、無不曲盡其妙、……」

塞下曲

塞下の曲うた

邊頭何慘慘

辺頭何ぞ慘々たる

己葬霍將軍

己すまに霍將軍を葬ほおむる

3 部曲皆相弔

部曲 皆みな相あひ弔とむらい

燕南代北聞

燕南代北に聞きこゆ

5 功勳多被黜

功勳 多くは黜しりぞけられ

兵馬亦尋分

兵馬 亦また尋にかわかに分わかたる

7 更遣黃龍戍

更さらに遣つかわす 黃龍の戍まもり

唯當哭塞雲

唯ただ當まさに塞雲に哭なすべし

(『王昌齡詩集』拾遺)

『文苑英華』卷197

『樂府詩集』卷92

〔訳〕

辺境の地の何と痛ましいことか

霍去病かくまへいの再来と謳うたわれた將軍も今は土に眠る
配下の部隊は悲しみのうちに死者を弔い
訃報は燕南・代北の地に伝わる
戦功に輝く勇將も多くは退けられ
輩下の軍にもまた俄にわかな部分け
さらに黄龍に向かえとのお達しとか
この上はただ 塞外の雲に慟哭するのみだ

ハ注

0. 塞下曲… 『樂府詩集』は「塞上曲」に作る。なお、李氏校注に「文苑英華作塞上曲」というのは誤り。『文苑英華』は「塞下曲」の条に収める。

1. 邊頭何慘慘… 『文苑英華』は「邊頭」を「邊城」に作る。
「慘慘」は心をいためるさま。また、暗いさま。『詩經』・大雅・へ抑

「視爾蔓蔓、我心慘慘」・毛傳「慘慘・憂不樂也」
魏・王粲・「登樓賦」
「風蕭瑟而並興兮、天慘慘而無色」
唐・李善・注「通俗文曰、暗色曰黥、慘・與黥古字通」

2. 霍將軍.. 漢の將軍霍去病を言う。ここでは、「霍去病にも喩えられる名將」の意味
に取るべきであろう。
唐・崔顥・「霍將軍」
「長安高第高入雲、誰家居住
霍將軍」

3. 部曲皆相弔.. 「文苑英華」は「士卒皆來弔」に作る。「部曲」は軍隊の部分け、部隊。
宋・鮑照・「代東武吟」
「將軍既下世、部曲亦罕存」

4. 燕南代北.. 燕は河北省地域の古名。代は戦国時代、代国のあった地。李國勝氏の注にあるように、今の山東省東北部から河北省蔚縣付近の地域にあたり、燕の地の西南部に位置する。
「漢書」・卷28・地理志下・「代郡、... 縣十八・桑乾・道人・當城、... 代・靈丘・廣昌・鹵城」
唐・顏師古・注「應劭曰、故代國」
同・地理志下・「燕地・尾、箕分壑也、... 東有漁陽、右北平、遼西、遼東、西有上谷、代郡、雁門、... 皆燕分也」
北周・庾信・「燕歌行」
「代北雲氣晝昏昏、千里飛蓬無復根」

5. 功勳多被黥.. 「文苑英華」は「功勳」を「功門」に作る。なお、この句は先の「塞

下曲 三首其三」の注にあげた梁・劉孝威・へ隴頭水」の「勿令如李廣、功多遂不酬」の句に似る。

6. 兵馬 .. 武器と軍馬。あるいは兵士と軍馬。軍隊を指す。唐・李白・へ送族弟綰

從軍安西」・「漢家兵馬乘北風、鼓行向西破犬戎」

尋 .. 「ついで、まもなく」の意味に訳すのが一般的なようだが、ここでは「にわか

に」と取った方がよいように思う。

晉書」・卷卅・羊祜傳・「以身設陛下

辱高位、傾覆亦尋至」 梁・劉峻・へ重答劉秣陵沼書」・「尋而此君長逝、化為異物」

7. 黃龍 .. 今の吉林省一帯の地域を指して言う。この地域は契丹と境を接し、しばしば

紛争があった。

舊唐書」・卷199・北狄傳・契丹、居潢水之南、黃龍之北、

鮮卑之故地、在京城東北五百里」

梁・蕭子顯・へ燕歌行」・「還看白馬

津上吏、傳聞黃龍征戎兒」 唐・李白・へ獨不見」・「白馬誰家子、黃龍邊塞兒」

8. 哭 .. 和刻本「王昌齡詩集」は「哭」字に作るが、他の諸本に従って「哭」と改めた。

なお、原田憲雄氏は「王昌齡伝」(「方向」14号)においてこの詩句に触れ、次のように述べられる。「末句の「哭」は「文苑英華」樂府詩集」全唐詩」みな「哭」とし、そのほうが一見、通りはよいが、詩の味わいの深さ、諷刺の痛

烈は、「笑」には及ばぬ。(77頁) 確かに指摘の通りではあるかも知れないが、しかし、王昌齡の他の作品を通覧してみても、そのようなひねりをきかせた表現は一寸見当らない。彼の抒情は、むしろそれとは反対の、直截でひたむきな姿勢を本来的な性格として持っているように思われる。やはり「哭」が穏当なのではないだろうか。

塞雲…唐・陳子昂・へ還至張掖古城聞東軍告捷贈韋虛己▽。「屢闢關月滿、三捷塞雲平。」唐・常建・へ塞上曲▽。「塞雲隨陣落、寒日傍城沒。」

代扶風主人答

扶風の主人の答うるに代^かわる

殺氣凝不流 殺氣 凝りて流れず

風悲日彩寒 風悲^{かな}しくして 日彩^ま寒し

浮埃起四遠 浮埃 四遠に起り

遊子彌不歡 遊子 いよいよ歡ばず

5 依然宿扶風

依然として扶風に宿り

沽酒聊自寬

酒を沽かって聊まか自みづから寬ゆるうせんとす

寸心亦未理

寸心もまた未なだ理おきまらず

長銃誰能彈

長銃ちゆうきゆう誰たれか能よく彈やせん

主人就我飲

主人 我われに就つきて飲み

對我還慨嘆

我われに對たいして還また慨嘆がいたんす

便泣數行淚

便すなわち泣なくこと數行すうかうの淚なみだ

因歌行路難

因よつて歌うたう 行路かうろ難がた

十五役邊城

十五 邊城へんじやうに役やくせられ

三回討樓蘭

三回さんかい 樓蘭ろうらんを討うつ

15 連年不解甲

連年 甲よろいを解かず

積日無所餐

積日 餐くらうところなし

將軍降匈奴

將軍 匈奴に降くだり

國使沒桑乾

國使 桑乾に没す

去時三十萬

去る時は 三十万なりしに

20

獨自還長安

独ひとり自みづから長安に還る

不信沙場苦

沙場の苦を信ぜざれば

君看刀箭瘢

君 看みよ 刀箭の瘢きずを

鄉親悉零落

郷親は 悉みなとく零落し

冢墓亦摧殘

冢墓も また摧殘す

仰攀青松枝

仰いで攀すがる 青松の枝

慟絶傷心肝

慟絶 心肝を傷いたましむ

禽獸悲不去

禽獸も悲しみて去らず

路傍誰忍看

路傍 誰か看るに忍びん

幸逢休明代

幸さいわいいに休明の代よに逢い

寰宇静波瀾

寰宇 波瀾 静まれり

老馬思伏櫪

老馬 伏櫪を思かなしみ

長鳴力已殫

長鳴すれども力は己すまに殫つきたり

少年與運會

少年は運と会わんに

何事發悲端

何事ぞ 悲端を發するは

天子初封禪 天子 初めて封禪し

賢良刷羽翰 賢良は羽翰を刷う

三邊悉如此 三邊 悉く此の如し

否泰亦須觀 否泰もまた須らく觀るべし

(『王昌齡詩集』卷ノ 『唐詩紀事』卷24)

ハ詠

冬の冷気は凍てついて動かず

鳴りざわめく北風に 日差しも寒げ

浮塵は四遠に舞い上がり

旅の身は いよいよ心塞ぐ

人恋しさに扶風に宿り

酒を買って ひと時の憂さばらし

だが 方寸の胸のうちさえ儘ままにはできず

長剣を叩いて不遇を訴えよう気力も起らない

酒の相手はこの屋の老主人おるじ

私わがを前にしきりに嘆なげく

語るうちにも涙はあふれ

そこで歌い出す 『行路難』の曲

「十五の歳で兵隊にとられ

幾度も檟わし蘭を攻め討った儂わし

来る年来る年 鎧も脱がず

食うや食わずの辛い日々

将置は匈奴に捕えられ

使者は桑乾河で命を落とす

国を出る時三十万の大軍も

長安に やつと帰り着いたは儂わしひとり

戦場の難儀が信じられぬというのなら
御覽下され この傷痕を

郷にに戻れば肉親ことごとくが土の下

皆が眠るその墓地はも荒れ放題

青い枝を揺げる松の幹にすがりつき

胸もはり裂けよと泣き叫べば

鳥や獣も悲しげに見守りつづけ

通りすぎる人々は 思わず目を伏せもらい泣き

今はさいわい太平の御世

天下の波瀾も静まりました

この老いぼれ 馬屋から出てもう一働きと思っはみても

嘶いないて訴える声にさえ　もう力はありませぬ
 それにひきかえ　若いお前さまはまだこれから
 どうしてそんなにお嘆なげきなさるのか
 天子様は先頃はじめて封禅なされ
 才ある方々は　羽をぬぐって飛び立つばかり
 諸君　すみずみまで治まったこの今こそ
 御自身の運勢を　ぜひとも見極めなされませ」

ハ注

○ 扶風…今の陝西省鳳翔縣の南の地。

『元和郡縣志』卷2・關内道・鳳翔府。

「扶風縣、本漢美陽縣地、武德三年、分岐山縣置圍州縣、屬岐州、…四年隸入
 稷州、貞觀元年、廢稷州、以縣屬岐州、八年改爲扶風。」

なお、この作品は、譚優學氏「王昌齡行年考」（『文學遺產』増刊十二輯・所収）
 の指摘にある通り、「天子初封禪」の句から、開元十三年暮頃の作と推定される。
 （第35句注・参照）

1. 殺氣 .. 草木を枯らす秋冬の寒氣。 『禮記』・月令・「中秋之月、殺氣浸盛」。

唐・岑參・「登北庭北樓呈幕中諸公」・「日暮上北樓、殺氣凝不開」。

『唐詩紀事』は「煞氣」に作る。

2. 日彩 .. 和刻本 『王昌齡詩集』の校記には「一作月」というが、「日彩」が良いであ

らう。

3. 浮埃 .. 『唐詩紀事』は「浮塵」に作る。

4. 遊子彌不歡 .. 『王昌齡詩集』は「迷不歡」に作るが、『文鏡秘府論』・地卷・十七

勢にこの詩の冒頭四句を引き、「昌齡代扶風主人答云、殺氣凝不流、風悲日彩寒、浮埃起四遠、遊子彌不歡」と記す。これに従う。「遊子」は旅人。ここで

は王昌齡自身を指す。 晉・陸機・「於承明作與士龍」・「婉孌居人思、紆鬱遊子情」 晉・盧諶・「贈崔溫」・「遊子恒悲懷、舉目增永慕」。

5. 依然 .. 思慕の情がわきおこるさま。また、心ひかれるさま。 梁・江淹・「別賦」

「惟世間兮重別、謝主人兮依然」 文選六臣注「韓曰、……依然、不能無情」。

6. 聊自寬 .. 魏・文帝・「燕歌行」・「誰能懷憂獨不歡、展詩清歌聊自寬」。

7. 寸心亦未理

「寸心」は方寸のむねのうち。こころ。

晉・陸機・八文賦

「函縣邈於尺素、吐滂沛乎寸心」唐・李善・注・「列子・文摯謂叔龍曰、吾見

子之心矣、方寸之地虛矣」この一句、「理」字の意味の取り方によつて幾

つかの解釈が可能なるように思われ、なお定解を得ていない。ここでは、「莊子」

に見える「理心」の用例から、心をおさめる、心をととのえるの意義に取り、

「憂悶を払い去つてくれるはすの酒が、方寸の胸のうちさえ平靜に治めることか

できない」という方向に理解してみた。「莊子」則陽篇・「今人之治其形、

理其心、多有似封人之所謂」

8

長鋏誰能彈

戰国時代、齊の馮諼（『史記』は馮驩に作る）の故事を踏まえる。孟

嘗君の食客となり、劍をたたきながら歌つて、自身の不遇を訴えた。「長鋏」は

つかの長い劍、或いは長身の劍。「彈鋏」は、窮境にある者が俸祿・地位を求め

るたとえに用いられる。「戰國策」・齊策下・「齊人有馮諼者、貧乏不能自

存、使人屬孟嘗君、願寄食門下、……居有頃、倚柱彈其劍歌曰、長鋏歸來乎、

食無魚、左右以告、孟嘗君曰、食之、比門下之食客、……後有頃、復彈其劍鋏歌

曰、長鋏歸來乎、無以為豕、左右惡之、以為貪而不知足、孟嘗君問、馮公有親乎、

對曰、有老母、孟嘗君使人給其食用、無使乏、於是復歌」唐・駱賓王・

八詠懷古意上裴侍郎・「窮經不需用、彈鋏欲誰申」同、八寒夜獨坐遊子多懷

簡知己・「富鈞徒有想、貧鋏為誰彈」

12. 行路難… 樂府の題名。「變行路難」注、参照。

13. 十五役邊城… 「全唐詩」は「邊城」を「邊地」に作る。譚優學氏が「王昌齡行

年考」で指摘されるように、以下の老人の回想は、先の「塞下曲」三首、其一の注記にも挙げた古樂府「十五從軍征」の内容と酷似している。恐らく、古樂府の詩世界をベースにして歌われたものであろう。(なお、この「十五從軍征」は原型のままでは伝わらず、梁代の宮庭樂辭「紫駟馬歌辭」中に歌いこまれた形で現存している。) 「樂府詩集」卷25 横吹曲辭五 八紫駟馬歌辭「十五從軍征、八十始得歸、道逢鄉里人、家中有阿誰、遙看是君家、松柏冢纍纍、兔從狗竇入、雉從樑上飛、中庭生旅穀、井上生旅葵、……出門東向看、淚落沾我衣」また、王昌齡のこの作品には、鮑照の「代東武吟」と一脈通ずるものもある様に感じられる。出来れば併せ看られたい。

14. 三回討樓蘭… 魏・左延年・八從軍行「苦哉邊地人、一歲三從軍」

「樓蘭」は漢代の西域の国名。今の新疆維吾爾自治区のロプノール湖付近の地。「漢書」卷96 西域傳上。「鄯善國、本名樓蘭、王治打泥城、去陽關千六百里、去長安六千一百里」唐・岑參・八胡笳歌送顏真卿使赴河隴「吹之一曲猶未了、愁殺樓蘭征戍兒」

18. 桑乾…河名。今の永定河。山西省馬邑縣の北に源を発し、河北省中部を流れて天津

浦口に至る。唐・李白・「戰城南」。「去年戰桑乾源、今年戰葱河道」。

『太平寰宇記』・卷51・河東道^上・朔州・馬邑縣。「桑乾河在縣東三十里、源出北山下」。

22. 刀箭瘢…刀や矢の傷あと。和刻本『王昌齡詩集』は「刀前瘢」に作るが、おそらく

は誤り。他の諸本に従って「刀箭瘢」に改めた。へ胡笳十八拍V。「塞上黃蒿兮枝枯葉乾、沙場白骨兮刀痕箭瘢」。

23. 鄉親悉零落…「零落」は死ぬこと。漢・孔融・へ論盛孝章書V。「海内知識、

零落殆盡」文選六臣注。「銑曰、零落、死也」。晉・陸機・へ門有車馬各行V。「親友多零落、舊齒皆雕喪」。

25. 仰攀青松枝…「攀」は、「木によじのぼる」または「枝を手もとに引きよせる」な

どと訳される場合が多いが、内親の死を悲しむ者の動作としては不自然なように思われる。或いは、死者を哭する際の風習としてそれに類した行為があったのか

とも考えられるが、それを裏づける確証も見当たらないようである。ここでは、「攀」を「すがる」の意味にとり、「上方の枝に顔を向け、手を伸ばす形で松の

幹にすがりつく」といった内容に理解してみた。『晉書』・卷88・孝友傳・王裒。「廬于墓側、且夕常至墓所拜跪、攀柏悲號、涕淚著樹、樹爲之枯」。

26. 慟絶 .. 氣を失うほど激しく泣く。南史曰、卷乃、余齊人傳、至門、方知父死、號踊慟絶、良久乃蘇。なお、唐詩紀事曰は「慟哭」に作る。

29. 休明代 .. 立派によく治まつた時代。宋・謝靈運・永初三年七月十六日之郡初發都、生幸休明世、親蒙英達顧。唐・崔湜・景龍二年余自門下平章事削階授江州員外司馬尋拜襄州刺史春日赴襄陽途中言志、幸逢休明時、朝野兩薦推。唐・殷寅・銓試後徵山別業寄源侍御、幸逢休明代、山虜尙交戰。

30. 寰宇 .. 天下。唐・駱賓王・帝京篇、聲名冠寰宇、文物象昭回。

31. 伏櫪 .. 馬が厩の中に伏していること。転じて、人が雌伏して時を待つことにたとえる。魏・曹操・碣石篇、老馬伏櫪、志在千里。

32. 長鳴 .. 「戰國策」に見える伯樂（馬を見分ける名人）と騏驎（名馬）の故事を踏まえる。昔、吳坂で酷使されていた騏驎が、通りがかつた伯樂に鳴いて苦境を訴えたという。晉・劉琨・答盧諶書、昔騏驎倚軻於吳坂、長鳴於良樂、知與不知也。唐・李善・注、戰國策、楚客謂春申君曰、昔騏驎駕鹽車上吳坂、遷延負轅而不能進、遭伯樂仰而鳴之、知伯樂知己也。今僕屈厄日久、君獨無意使僕爲君長鳴乎。

33. 運會 .. 時運にめぐりあう。 晉・盧諶・八贈劉琨書✓。「嘗自思惟、因緣運會、

得蒙持事、

34. 悲端 .. かなしみ。なげき。 唐・宋之問・八鄧國太夫人挽歌✓。「悲端若能滅、

渭水亦應窮、

35. 天子初封禪 .. 『舊唐書』・卷8・玄宗本紀上。「開元十三年冬十月辛酉、東封泰山、

發自東都、十一月丙戌、至袁州岱宗頓、丁亥、致齋於行宮、己丑、日南至、備法

駕登山、仗衛羅列、獄下百餘里、詔行從留於谷口、上與宰臣・禮官昇山、庚寅、祀

昊天上帝於上壇、有司祀五帝百神于下壇、禮畢、藏玉冊於封祀壇之石礎、然後燔

柴、燎發、羣臣稱萬歲、傳呼自山頂至獄下、震動山谷、上還齋宮、慶雲見、日抱

戴、辛卯、祀皇地祇於社首、藏玉冊於石礎、如封祀壇之禮、

なお、この一句は、原田憲雄氏の「天子さまは封禪とやらをなされるげな」という

詠説（「玉昌齡伝（一）」・82頁）のように、未來形の意味に取った方が良いかも知

れない。

36. 刷羽翰 .. 鳥が羽をぬぐいつくろうように、準備をととのえて待機する。の意である

う。似た表現として、王維の八秋夜獨坐懷内弟崔興宗✓詩に「思子整羽翰、及時

富雲浮、」の句がある。また、時代はやや後れるが、中唐の呂温の八喜儉北至送宗

禮南行✓詩に、「衡陽刷羽待、成取一行迴、」の句が見える。

三邊

李國勝氏は、日史記卷25・律書に見える「高祖有天下・三邊外畔」の節から、「三邊」を匈奴・南越・朝鮮の三国に比定される。原義はその通りかも知れないが、詩語としては、諸方の邊域々といつた程度の意味で理解すれば良いように思う。
隋・陳子良・入讚徳上越國公揚素入・「六郡多壯士、三邊豈足平」
唐・太宗・入執契靜三邊入・「執契靜三邊、持衡臨萬姓」

否泰

「否」「泰」はともに易の卦の名。運勢のふさがると通じること。運勢の諸相。
晉・陸機・入贈馮文羅遷斥丘令入・「否泰苟殊、窮達有違」
唐・

李善・注・「否泰、周易二卦名也」

なお、李國勝氏はこの結びの四句を、吳昌祺の説に従って「此言天子志在封禪、羣臣無意三邊、已恐否泰循環、亦可高枕而臥也」と解されるが、同意し難い。